

ロマン・キムと固有名の問題：日本に関連する諸作品

坂中紀夫

1. はじめに

探偵小説一般に働く「フェア・プレイ」という原則は、犯人指名のための必要十分な記述を作中に求め、飛躍した推理を禁止するものである。ところで、この原則を突き詰めた場合、この文芸ジャンルでは、他とは異なる作者と読者の関係が築かれることがある。その端的なものが、権威ある作者 (author/authority) に対する、読者の逆転劇である。作中で「探偵＝読者」に謎解きのための情報が過不足なく与えられていれば、ストーリー的結末における「犯人＝作者」の告白は無用となる。つまり、「ここでは『作者＝犯人＝ストーリー』の近代小説的な優位が、『読者＝探偵＝プロット』の探偵小説的な優位に変貌する、鋭角的な逆転劇が演じられているのだ」。¹ 第一次・第二次大戦間の英米本格探偵小説群がその代表であろう。

ところが、このような論理的な厳密さを重視する本格的な探偵小説は、ロシアでは一般的ではない。本論が後に主題とする推理作家ロマン・ニコラエヴィッチ・キム (1899-1967) も、「ロシア警察の探偵は、革命家、良心的なインテリ労働者全体に敵対する行動をとっていた」という「全く政治的な理由」から、「探偵小説のジャンルは十九および二十世紀（革命前）には発達し」² なかったと述べている。久野康彦の論にあるように、1870年代の黎明期のシクリャレフスキーの作品なども、英米の古典的な探偵小説にある「パズル的な面白さ」は希薄であり、二十世紀初頭の「分冊シリーズ探偵小説」でも「基本的に前面に出てくるのは追跡、格闘といったアクションの要素である」。³

だが、革命後もこの状況にそう変わらない。ハワード・ヘイクラフトは、ジャンルとしての探偵小説は、民主主義的な手続きが可能とする「公正さ」という現実的背景があって初めて成立するとの信念と経験的観察から、「探偵小説は本質的に民主的な慣習の産物であり、また今までずっとそうでありつづけてきたのだ」⁴ と論じ、社会主義圏におけるこ

¹ 笠井潔『探偵小説論序説』光文社、2002年、130頁。

² 江戸川乱歩「探偵小説の世界的交歓：チェーホフの長篇探偵(?)小説」『宝石』1956年10月号、72頁。翻訳は原卓也。

³ 久野康彦「革命前のロシアにおける探偵小説の歴史から：「ロシアのガボリオ」A.シクリャレフスキーと20世紀初頭の「分冊シリーズ探偵小説」」『ロシア語ロシア文学研究』第33号、2001年、106頁。

⁴ ハワード・ヘイクラフト (林峻一郎訳)『娯楽としての殺人：探偵小説・成長とその時代』国書刊行会、1992年、351頁。

のジャンルの存在を否定している。この主張のイデオロギー的な偏りは措くとしても、「正義」に対するヒーロー（探偵）の両義的な態度がロシア探偵小説に歴史的に認められることは、桜井厚二の論考が示すところのものである。⁵

さらに言えば、本格ミステリは社会主義体制の崩壊後もロシアでは一般化していない。二十世紀末から幾つかの優れた作品が現れつつあることは毛利久美の指摘にあるものの⁶、同時期のロシア探偵小説を総覧したアンソニー・オルコットの見解は次のようなものだ。

ロシア探偵小説は、読者がそれを解くことに喜びを覚える論理パズルになるようには、意図されていない。[...] ソヴィエト時代でも現代でも同じことだが、ロシア探偵小説が中心的に扱うのは、社会がその全成員をうまくコントロールできないようなときに、社会がこうむる集団的な被害なのである。⁷

天才的な探偵が個人の能力を駆使して謎を解明するのではなく、集団が受けた損害を、集団的な作業を通して回復させる。警察小説（民警小説）などによく見られる地道な捜査からやがて真相に至るとの構図は、パラドクスやトリックを多用し、くまなく調べても謎が解けないというプロットを意識的に構築するタイプの作品とは、確かに異質である。

しかし、ロシア探偵小説という全体的な問題については、その特徴の由来するところをこの国の法や経済システムに探るオルコットの議論に任せるとして⁸、では個々の推理作家は自らの創作の場所をどのように捉えていたのか。この問題に関して特に注目されるのがロマン・キムである。後述するように、キムは探偵小説に深く通じた作家で、その博識ぶりは作中の記述からも窺えるものだ。彼は恐らく、英米の大戦間期や日本の主に第二次大戦後に登場してくる推理作家らが持っていた、このジャンルの確立に伴う問題意識を共有しながら、創作を続けていた。だが、その彼の作品にしても、謎解きという点では厳密さに欠け、読後に受ける印象も、いわゆる本格推理のそれとは異質なのである。しかし、どうやら彼は古典的なパズラーを書く資質も具えていたようなのだ。では、なぜそれは書かれなかったのか。そして、それを書く代わりに、キムは探偵小説というジャンルで何を表現しようとしたのか。以下、我々はそれを彼の日本をテーマとした作品を中心に考えて

⁵ 桜井厚二「ロシア刑事探偵のフォークロア：ワイネル兄弟『恩恵の時代』を中心に」望月哲夫編『文化研究と越境：19世紀ロシアを中心に（スラブ・ユーラシア学の構築：中域圏の形成と地球化）』（北海道大学スラブ研究センター）第23号、2008年、40-56頁。

⁶ 毛利公美「現代ロシア探偵小説事情」『現代文芸研究のフロンティア(I)（研究報告シリーズ）』（北海道大学スラブ研究センター）No. 70、2000年、59-67頁。

⁷ Anthony Olcott, *Russian Pulp: the Detektiv and the Russian Way of Crime* (Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, 2001), p. 45.

⁸ *Ibid.*, pp. 17-24, 102-105, 147-150.

いく。

2. 複数の名前

キムは朝鮮人の両親のもとウラジオストクで生まれ、少年時代を日本で過ごした作家、「ソヴィエト政治・探偵小説の草分けの一人」である。⁹ 「文学関係の人が、モスクワへ行って、ロマン・キムさんのお世話にならなかった場合は、あまりないのではないかと思う」¹⁰ とまで評される人物だが、日本語で読めるのは「Тетрадь, найденная в Сунчоне」（『順川で見つけた手帖』。邦題『切腹した参謀たちは生きている』）のみである。¹¹ その生涯についても未だ謎が多く、没後、彼の名が学術的な文献で語られる場合も、「抑圧された東洋学者」としてであることが多い。¹² 後述する最近の幾つかの研究を除けば、これまではむしろ日本語で書かれたものの方が詳細であった。¹³

それによれば、キムがロシアで生まれたのは、彼の父が朝鮮併合に抵抗する反日運動家で、当時ウラジオストクに政治亡命していたためだった。1906年、キムは敵国を知るといふ父の意向で、僅か七歳で日本に送られる。その際にキムを預かるとされるのが、杉浦重剛である。杉浦が彼を受け入れた経緯は不明だが、来日後に慶應の普通部に進んだキムについて、同級生の回想には「金基劉」（学籍簿では「金夔龍」）が杉浦の「家の玄関脇の書生部屋」で世話になっていたとある。ただし、1913年に慶應を退学する際の学籍簿では、なぜか保護者は杉浦龍吉となっている。¹⁴

この二人の杉浦の関係は差し当たり不明であるが、国粹主義者の重剛よりはこの人物の方が反日活動家の息子を預かりそうではある。杉浦龍吉は東京外国語学校露語科などで学

⁹ Сорокина М.С. Жизнь, похожая на коробку спичек // Природа, № 4, 2006. С. 92.

¹⁰ 袋一平「キムさんとSF」『S-Fマガジン』1965年1月号, 75頁。

¹¹ ロマン・キム（高木秀人訳）『切腹した参謀達は生きている』五月書房, 1952年。ロマン・キム（長谷川蟻訳）『切腹した参謀たちは生きている』晩聲社, 1976年。

¹² Казак В. Энциклопедический словарь русской литературы с 1917 года. Лондон, 1988. С. 353-354. (перевели с немецкого Елена Варгафтик и Игорь Бурихин); Васильков Я.В., Гришина А.М., Перченко Ф.Ф. Репрессированное востоковедение. Востоковеды, подвергшиеся репрессиям в 20-50-е годы // Народы Азии и Африки, 1990, 4, С. 123.; Казак В. Лексикон русской литературы XX века. М., 1996. С. 182.; КИМ Роман Николаевич // Васильков Я.В. и Сорокина М.Ю. (ред.) Люди и судьбы. Биобиблиографический словарь востоковедов: жертв политического террора в советский период (1917-1991). СПб., 2003. С. 200-201.; Семлер Н. Лицом к лицу с мечтой // Tronto Slavic Quarterly. 2004 Summer № 9.; Сорокина. Жизнь, похожая. С. 91-95.

¹³ 木村浩「〈ある作家の肖像〉ソ連の推理作家ロマン・キムの謎の部分：三つの祖国を持ち歴史に翻弄された男の一生」『文藝春秋』1984年1月号。「1950年代に江戸川乱歩と文通していたソ連の推理作家ロマン・キムの数奇な生涯」『アジアミステリリーグ』
[<http://www36.atwiki.jp/asianmystery/pages/136.html>] 2015年1月31日閲覧。

¹⁴ 志賀直三『阿呆伝』新制社, 1958年, 25-28頁。木村「〈ある作家の肖像〉」321, 318-319頁。

んだ後、1888年にウラジオストクに渡航、日露戦争で1904年に帰国するまで当地の成功者として杉浦商店を経営する。¹⁵ キム一家との関係はこの時期にできたのだろう。

キムは1917年にロシアに帰国、大学卒業後の1923年からはモスクワの高等教育機関に勤め、1927年にはボリス・ピリニャークの『日本の太陽の根本』に「蛇足」と題した解説を寄せている。「蛇足」とは、それなしでもこの印象記は成立するし、「隣の島国の人間・圧制者の話をするのに、アイルランド人同様、朝鮮人が誤りを犯さずに客観的になることは困難である以上、客観性も狙っていない」¹⁶ からだ。この時期、彼は日本や中国に関する様々な論文を残すが、学者としての業績は1934年の黒島傳治の『前哨』の翻訳などを最後に途絶えてしまう。¹⁷

その三年後の1937年4月、キムは逮捕される。1940年7月、彼はロシア・ソヴィエト連邦社会主義共和国刑法 58-1a（祖国への反逆）違反で、二十年の自由の剥奪を言い渡され、当初はクイブイシェフの特別収容所で日本語の翻訳を（ソ連の日本大使館は1941年9月から1943年8月までここに疎開していた）、¹⁸ 後にはルビャンカ収容所で軍事関係の翻訳にあたることになる。ところがこの判決は、1945年9月に取り消し・再審となり、同年11月、彼は職権乱用の罪で8年9か月の自由の剥奪を言い渡される。釈放されたのは、37年4月から数えて刑期の満了となる翌月29日だった。名誉回復は1959年2月である。¹⁹

では、キムは一体何をしたのか。当時の在モスクワ日本人記者らは、彼が「内務部〔内務人民委員部〕の制服を着て」いた、「ソ連にいる日本人の監視役だった」と述べ、当時の妻マリアヌ・ツィンも、夫の「仕事は秘密のものだった」と語っている。²⁰ その「秘密」が近年、少しずつ明らかになってきた。発端となったのは、O. B. モゾーヒンがキムの供述をもとに発表した「キム事件」だ。²¹ 逮捕から約一月半後にスターリンにも伝えられたこの事件の内容は、以下のようなものだった。

キムは実は日本人である。彼は、帝政期にロシア公使・大使を務め、後に外相となる本野一郎の婚外子で、本名を「モトノ・キング」といい、教育を受けたのも慶應ではなく学習院だった。²² 父の口利きで学習院に入学したものの、本野姓では都合が悪く、名前は「サ

¹⁵ 黒龍会編『東亜先覚志士記伝（下）』原書房、1966年、755頁。入江寅次『邦人海外発展史（下）』原書房、1981年、435頁。

¹⁶ *Kim P.H. Ноги к змее (глоссы). М., 2014. С. 131.*

¹⁷ КИМ Роман Николаевич // Люди и судьбы. С. 201.

¹⁸ *Куланов А.Е. В тени восходящего солнца. М., 2014. С. 199.*

¹⁹ *Сорокина. Жизнь, похожая. С. 92-93.; КИМ Роман Николаевич // Люди и судьбы. С. 200-201.*

²⁰ 木村「〈ある作家の肖像〉」323-324頁。米重文樹編集代表『日露オーラルヒストリー：はざままで生きた証言』彩流社、2006年、216頁。

²¹ *Мозохин О.Б. Противоборство. Спецслужбы СССР и Японии (1918-1945). М., 2012. С. 333-339.*

²² キムは「リツエイ」と述べたようだ。「蛇足」では武者小路実篤の出身校もこの言葉で呼ばれて

オリ・キンゴ」で通していた。「サオリ」とは本野の母の名である。²³ 学習院を卒業後、彼は本野家の伝統に従い外交官になるべく 1917 年にウラジオストクに移り、当地で高等教育を受ける。

1923 年、大学を卒業したキムに、ウラジオストク総領事だった渡邊理恵が接触する。すでにその前年から、白軍の徴兵免除という便宜を図っていた総領事館は、今後の更なるキャリアの約束と引き換えに、極東沿岸部の国家政治保安部 ОГПУ への潜入を依頼、彼はそれを承諾し実現させる。

だがその直後、キムは「日本の参謀本部の非公然の現地諜報指導役の秘書としてモスクワへ行くことになる」。²⁴ モスクワで彼は合同国家政治保安部 ОГПУ に潜入、日ソの外交関係が再建された 1925 年からは日本の在ロシア駐在武官の指示で活動を始め、1932 年には ОГПУ の対日防諜の指導的な役職に昇進。彼は「日本関係の諜報員のリスト、ОГПУ の組織構造、防諜活動の体制と方法、監視対象、また朝鮮関係の工作の内容」²⁵ を漏洩させたとされている。

ただし、モゾーヒンの研究には「逮捕された被告の記述がそのまま事実であるかのように記述されており問題が多い」²⁶ との批判も寄せられている。この批判が「キム事件」にも当て嵌まるとすればどうだろう。つまり、彼が意図的に供述を捏造した可能性である。

実際、キムの供述は非常に上手くできている。例えば、本野一郎の名を出した点だ。本野は 1898 年 10 月にベルギー公使になるが、それはキムが誕生するおよそ十か月前のことで、それ以前は在ロシア公使館一等書記官だった。つまり、懐妊した相手をウラジオストクに残し、ベルギーに移ったという筋書きが辛うじて成立しそうなのである。取り調べる側も、四十年近く前の出来事を確認するのは簡単ではなかったはずだ。とはいえ、当時のロシア公使館はペテルブルグにあり、この距離は現実的には埋め難かっただろう。

A. E. クラーノフも、モゾーヒンのキムの出自に関する記述に疑問を呈している。キムが本野一郎の私生児だったとして、日本人の彼が幼少期をどうロシアで過ごすことができたのか。彼の母はベルギー公使といかにして接点を持ち、その後ウラジオストクにいるのはなぜか。彼が日本人なら、日本の小説をロシア語に翻訳できた語学力をどう説明するのか。²⁷

要するに、「モトノ・キンゴ」とは実在の人物だとは思えないのだ。彼がウラジオスト

おり (Kim. Ноги к змее. С. 147.), ここでは学習院とした。

²³ 実際には「總子」。あるいは私生児の母のことか。

²⁴ Мозохин. Противоборство. С. 335. この指導役はナウカ創設者の大竹博吉だったとされている。

²⁵ Там же. С. 338.

²⁶ 寺山恭輔「О.Б.Мозохин, Противоборство. Спецслужбы СССР и Японии (1918-1945)」『ロシア史研究』(ロシア史研究会) № 93, 2013 年, 87 頁。

²⁷ Куланов. В тени. С. 219.

ク出身で朝鮮系であることは、多くの伝記的記述が傍証し、何より本人が取調よりも遙かに自由な状況で何度も語っていることなのである。A. M. ブヤコフが明らかにしている、キム自身の言葉や内務人民委員部が作成した彼の資料を見てみよう。²⁸

1935年6月のアンケートでキムは自身を朝鮮民族だとしている。父は日本の内政干渉の間、ウラジオストクに移住、自分もそこで生活していた。母は朝鮮貴族にあたる。日本で学んでいたのは1917年までで、「杉浦キンジ」と名乗っていた。保護者である杉浦龍吉が、朝鮮併合後に自分を養子にしたためである。帰国後はロシア国籍で大学に入るが、日本の総領事館に杉浦の養子＝日本人であることを証明してもらい、内戦下での学徒動員を免れた。英仏日語の読み書き、中国語の会話ができるが、母語（朝鮮語）は殆ど知らない。

自伝的な記述でも出自についてはこうある。両親ともに朝鮮系、ウラジオストク生まれで、学童年齢に達するころ日本に送られた。ただしこちらでは、1922年11月末から ГПУ との関わりが始まったことへの言及があり、また内務人民委員部が逮捕前に作成した資料でも、1932年にキムが ОГПУ で捜査係についたとの記述がある。これらは所々、モゾーヒンの「キム事件」と合致している。

以上から推察されるのは、逮捕後のキムが虚実ないまぜの供述を行ったことである。最大の偽証は自らを本野一郎の息子に仕立て上げたことだろう。これに関して注目されるのが、一介の諜報員・日本学者の逮捕がスターリンに伝えられ、その審理期間が三年以上にも渡ったことである。クラーノフによれば、同じように逮捕された日本学者に判決が下るまで二か月を超す例は殆どなかったにも関わらず。²⁹

では、なぜ「キム事件」は長期化したのか。それを差し当たり説明しうるのが、「モトノ・キンゴ」をめぐる物語である。諜報の心臓部に別の国のエージェントが潜入していたこと、しかもそれが日本の元外相の私生児だったというのである。通常、軍関係の国家反逆には刑法 58-16 が適用され、その罰は銃殺刑のみである。そして、逮捕時のキムは国家保安上級中尉、軍でいうと少佐だった。³⁰ 従って、その適用は他国の大臣を務めた人物の子弟を処刑することであり、外交問題に発展しかねない。「キムの逮捕がスターリンに報告されたことは驚くに当たらない、このゲームでいかなる対応策を日本人に示すかを決定できるのは彼を措いていなかったのだ」。³¹ その対応策こそ刑法 58-1a の例外的な適用だったのかもしれない（禁固期間も本来は十年である）。

²⁸ Там же. С. 320-326. を参照。

²⁹ Там же. С. 198-199, 206, 208, 218.

³⁰ Там же. С. 207.

³¹ Там же. С. 208.

3. 「謎—論理的解明」の逸脱

恐らく「モトノ・キンゴ」は、最悪の結果を回避するために慎重に考えだされた架空の人物である。そして、それ以外の複数の名前も、その時々々の立場に合わせた仮名、いわば役割の記述の代用だったのだ。そして、ロマン・キムという本来の固有名が隠され続ける過程で、彼は母語さえも分からなくなっていく。

しかし、本論においてキムが重要であるのは、こうした特異な経歴や、彼の作品が「恐らく、ロシア語で書かれた最良の探偵小説である」³² からだけでなく、彼が本格的な探偵小説というものに知悉した作家だったことにある。例えば、真珠湾攻撃直前の日米の暗号戦がテーマとなる「По прочтении сжечь」（『読後焼却のこと』）では、次のような場面がある。暗号についての会話で、一人の米兵が日本の暗号は「リリアン・デ・ラ・トーレの『盗まれたクリスマス・プレゼント』と同じ方法 […] コナン・ドイルが『恐怖の谷』で挙げた方法 […] アントニー・ウィンの物語『二重の十三』 […] クロフツの『フレンチ警部最大の事件』で語られる手法 […] アガサ・クリスティーの短編『四人の容疑者』などの方法を駆使したものだと言うと、もう一人がポーの『黄金虫』のことを口走ってしまい、『黄金虫』やコナン・ドイルの『グロリア・スコット号事件』、『赤い輪』のような初歩的な方法」はもはや通用しないと馬鹿にされてしまう。³³ つまり、ここでキムは、暗号の進化を黎明期の探偵小説から大戦間探偵小説およびその周辺作品への成熟を例に述べているわけだ。

探偵小説に関するキムの知識は欧米の作品に限られない。彼は、日本の作品にも通じており、江戸川乱歩とも数通の手紙を交わすほどだった。³⁴ キムがそこで披露している日本人推理作家についての知識は、乱歩に「外国人としては驚くべき日本探偵小説通である」とまで言わせるものだ。³⁵

ところで、キムの作品では、実は日本が頻繁にテーマとして取り上げられている。このことと、先ほどの評価とを考え合わせるなら、それらの作品群も乱歩に代表される日本人作家らの優れた作品とそうかけ離れていないことが予想されてくる。とりわけ守られているであろうと思われるのは、乱歩が『幻影城』において示した「探偵小説とは、主として犯罪に関する難解な秘密が、論理的に、徐々に解かれて行く経路の面白さを主眼とする文学である」³⁶ との規範である。これにはキムもまたその趣旨に賛同して、創作の際には「探

³² Сафонов В. Альпийские луга // Ким Р.Н. Тайна ультиматума: повести и рассказы. М., 1969. С. 317.

³³ Ким Р.Н. По прочтении сжечь // Ким. Тайна ультиматума. С. 206-207.

³⁴ 江戸川「探偵小説の世界的交歓」。同上「ソ連と中共の近況：ロマン・キム氏から第二信」『宝石』1957年1月号。同上「海外近事：アメリカ、ソ連、オランダ」『宝石』1957年8月号。

³⁵ 江戸川「探偵小説の世界的交歓」69頁。

³⁶ 江戸川乱歩「幻影城」『江戸川乱歩全集18』講談社、1979年、27頁。

偵小説の興味を保持」³⁷ することが重要だと述べている程だ。そして実際、彼の日本に関連する作品群も、「謎—論理的解明」の構成にはなっている。しかし注目に値するのは、それらがことごとく不完全であったり、逸脱を見せたりしていくことである。以下、それを具体的に検討していこう。

キムの作品で日本がテーマとなっているのは、『順川で見つかった手帖』や『読後焼却のこと』の他に、「Девушка из Хиросимы」（『広島からきた少女』）、「Школа призраков」（『幽霊たちの学校』）、「Тайна ультиматума」（『最後通牒の謎』）、「Японский пейзаж」（『日本の風景』）などである。³⁸ このうち『日本の風景』はあまり探偵小説的ではなく、『広島からきた少女』も「謎—論理的解明」の形式性は抑制されている。一方それが顕著なのは『読後焼却のこと』、『幽霊たちの学校』、『最後通牒の謎』である。しかし、こうした方向性の違いにも関わらず、本論の考えでは、これらの作品は全てある同じ問題、英米や日本の本格ミステリ作家たちも共有していた問題を扱っている。

『順川で見つかった手帖』は『切腹した参謀たちは生きている』との題で邦訳がある。改題の理由は不明であるが、このタイトルからは「死んだと思われていたはずの人物が、実は生きていて真犯人だった」との推理小説によくあるパターン（キャンピットパールストン先攻法）が予想されてくる。だが実際には、太平洋戦争の無条件降伏で自決しようとしたある将校が、その決心を改め、傍にあった遺体を自分のものと偽装し、別人格として生きていくとのストーリーが、「実はこうだった」という形ではなく、地の文として読者に与えられるのである。敗戦直前から朝鮮戦争にかけての日米の政治的内幕が明かされるこの作品では、「すべて実名で、『戦後』というもののイメージを一変させてしまうようなことが描かれて」³⁹ いる。とはいえ、一部に意外な真相（主人公の同僚「たち」も生きていた）はあるものの、それが論理的に解明できるようには作られておらず、むしろ焦点はスパイの暗躍に置かれている。

『最後通牒の謎』では、「謎—論理的解明」の構図が明確である。この短編小説は、1920年のニコラエフスクで赤軍パルチザンが行ったとされる住民虐殺「尼港事件」の惨状を知ったシベリア出兵中の日本軍が、同年4月4日から5日にかけてウラジオストクで始めた実在の軍事行動を描いたもので、物語自体は作戦に参加したモモノイ少佐の手記という体裁を取っている。4月2日、モモノイは上官のイソメ大佐とともにプリモールスキー地方の政府建物に向かい、武装解除を含めた六つの要求からなる最後通牒を行う。だが、彼に

³⁷ 江戸川「探偵小説の世界的交歓」71頁。

³⁸ *Ким Р.Н.* Девушка из Хиросимы. М., 1956; Он же. Школа призраков // *Ким Р.Н.* Школа призраков. Кто украл Пуннакана? Кобра под подушкой. Тетрадь, найденная в Сунчоне. М., 1971; Он же. Тайна ультиматума // *Ким.* Тайна ультиматума; Он же. Японский пейзаж // *Ким.* Тайна ультиматума.

³⁹ 秘密兵器「時評・政治：“切腹した参謀達は生きている”」『新日本文学』1976年5月号、9頁。

はこの行動が解せない。参謀部には孫子の兵法を崇拜するグループがあり、その教えは、勝敗は実行部隊の指揮官の臨機応変な判断や奇襲の有無に左右されるとしていたからだ。モモノイはその帰路、最後通牒の理由をイソメに問うが、「そういきり立つな。必要なのだ、後で分かる」⁴⁰と諫められる。

4日午後、赤軍側はこの要求を受け入れ、武力衝突は回避されたかに思われた。ところがこの日、モモノイは奇妙な指令を受ける。部下と街を巡回し、パルチザンの待ち伏せを発見次第、敵の頭の上へ向けて発砲せよとの任務である。しかし巡回に出た彼は、暗がりにもうごめく人影を本物の脅威であると判断し、そこに直接、攻撃を命じてしまう。これに続くように、赤軍側を殲滅すべく各所で作戦行動がとられ、次々と戦勝報告が寄せられることになる。

軍部が勝利に沸く中、モモノイは参謀長が通信員に語るのを聞いてしまう。「当方は、モモノイ少佐及び兵士を要塞司令部方面へ派遣[……。午後九時半、エーゲルシェリド[ウラジオストクの街]から近づくパルチザン横隊が駅広場に出現。当方の車両を発見するや、先にパルチザンが無警告で攻撃してきた。当方の反撃で、パルチザンは敗走したものの、彼らは広場に二体残していった。ユゲ少佐とタガヤ兵長である。ロシア人が二人を捉えて、敗走時に殺害したことは明らかである」。⁴¹つまりモモノイは、敵の各拠点を攻撃する口実のために配置されていた仮の敵役を誤って殺害してしまったのだ。

結局のところ、最後通牒の「謎」とは、敵に数日間の緊張状態を強いることで睡眠を奪い、その受け入れ後の油断に乗じて、文字通り寝こみを襲うところにあつたのである。⁴²しかし、本格ミステリを思わせるタイトルでありながら、この作品で謎が成立したのは蓋然的である。相手が最後通牒を必ず飲むとの伏線が張られているわけではないからだ。もしそれが退けられていたらどうしたのだろうか。そもそも、モモノイに作戦の意味が伏せられていた理由が不明である。そのせいでユゲ少佐とタガヤ兵長が失われてしまったのだから。つまりここでは、謎解きの形式性よりも、謀略がかえって犠牲を生んでしまったことに主眼が置かれているのである。

同じように、『読後焼却のこと』も戦争を描いた作品だ。ここに登場する「謎」は主に二つである。だが、いずれにも「論理的説明」はない。一つ目は、日本海軍の軍令部第三部(情報担当)の将校イデが残したメモにあつた「QQQ」との暗号の意味だ。だがこれは、物語の結末でイデの同僚テラノ海軍大尉が真相を語ることで解決する。二つ目の方がより探偵小説的である。

作品の冒頭、テラノとイデは新式の暗号機(九七式欧文印字機)をワシントンの日本大

⁴⁰ *Ким. Тайна ультиматума. С. 95-96.*

⁴¹ *Там же. С. 106.*

⁴² *Там же. С. 104.*

使館へと送り届ける特命を受ける。しかし、実はその情報はアメリカ側に洩れており、命令遂行中に、暗号機の複製作成のための資料が盗み取られることになる。以降、日本は解読されているとは知らずに電文を発し続け、1941年11月18日にはワシントン大使宛てに「非常事態時のラジオによる特別連絡に関して」との重要事項を送ってしまう（東京回章2353号）。それは、非常事態（外交関係・国家間関係の停止）の際には、短波ラジオの天気予報の真ん中と終わりに「日米間の場合は『東の風、雨』、日ソ間の場合は『北の風、曇り』、日英間の場合は『西の風、晴れ』」⁴³と二度繰り返すことを伝えるものだった。以降、アメリカ側は日本の天気予報に注意を配り、12月4日の東京からの放送に次の文言を発見する。

東京地方、本日、北の風、次第に強まる、曇りの可能性。神奈川県地方、本日、北の風、曇り。
千葉県地方、北の風、晴れのち曇り、波おだやか。⁴⁴

ここで不正確ながら二度繰り返されている「北の風、曇り」から、米軍の暗号部隊は日本の開戦国はソ連に違いないとの判断を下す。だが、現実に12月8日に攻撃を受けたのは真珠湾であり、作中でも同様である。では、あの放送は何だったのか。これが第二の謎であり、その意味も結末で明らかとなる。実は、あれは「合図などでは全くなく、外国向けに普段から東京で流している短波放送の最後のニュースの後の天気概況」⁴⁵だったのだ。しかし、これはいかにも拍子抜けする真相で、論理的説明も何もあったものではない。敢えて好意的にとるなら、暗号の意味を深く探ろうとするほど、真相（表面＝文字通りの意味）から遠ざかることに、肩すかしの意外性はあるのかもしれない。

『幽霊たちの学校』の舞台はアフリカのスパイ養成機関で、主人公はこの学校に通う「私」だ。物語は、「私」をそこへ入学させた「ボス」への数通の「報告書」からなり、この部分を「問題編」、最後の連絡「報告書に代えて」を「解決編」と見ることができる。タイトル「幽霊」がスパイを指すのは、それが「影」⁴⁶の存在、個性を失った記号的存在であるからだ。

この学校では日本の「忍術」が、スパイが習得すべき重要な武器として学生たちに教えられる。それを指導する教官たちは画家の名前で呼ばれ、忍術の講義を担当するのは「歌麿」である。「歌麿」は日本の忍者のような、中国の昔の二重スパイの例を語り、「世界地

⁴³ *Kim. P.H. По прочтении сжечь. С. 219.*

⁴⁴ *Там же. С. 244.* これは真珠湾攻撃についてのアメリカの下院と上院の合同調査委員会の資料の中から見つかったものとされている。

⁴⁵ *Там же. С. 305.*

⁴⁶ *Kim. Школа призраков. С. 36.*

図を見たまえ。近東，東南アジア，ラテン・アメリカやアフリカ，大量の小国があるだろう。この光景は，まさに封建制群雄割拠時代の古代中国と同じではないか」⁴⁷ と説く。この学校はつまり，国際政治の不安定要素や経済界の動きに乗じてスパイを送り込み，利益を得ることを目的とした機関だったのである。

だが，ある作戦を遂行中，学校の代表である「指揮官」が殺されてしまう。クウェートの大物石油商ユスフ・アル＝ルサフィが来訪するとの情報を得た「私」たちは，金銭と引き換えに政府の石油関係の秘密をリークすると彼に持ち掛け，了承を得る。しかし，これには実は裏があった。機関はアル＝ルサフィを殺害し金銭を奪った上で，遺体と共にアフリカ諸国での「赤の陰謀」に関する書類を残し，世界的な反社会主義的気運を起こそうとしていたのだ。⁴⁸

機関はこの作戦を実行に移すが，アル＝ルサフィとの密会場所に残されていたのは，彼ではなく「指揮官」の遺体だった。直接，現場に居合わせたのは，石油商，その案内役，殺人の実行役，書類の挿入役の四名で，「指揮官」は挿入役だった。この謎をめぐり，「私」は可能な犯行の四つのパターンを推理するが，それらは何れも正しくなかった。

「問題編」で答えが出なかったのは，主人公の推理が甘かったからだ。というより，彼は敢えて徹底した追及を避けている。案内役を端から潜在的な犯人のリストから外しているのだ。そして，その人物こそ「私」だった。実は「私」は石油商を救おうと，彼に別のルートを指示したのだ。アル＝サフィが消えた結果，当初の計画通り動いていた「指揮官」はいわば「偶然」に殺害されてしまうことになる。⁴⁹

潜在的に犯人の可能性がある三名の内，語り手の「私」だけが最初から疑いを免れていること。とはいえこれは，仮に「私」が犯人であったとしても，語り手の意図的な隠し事，つまり省略法であり，虚偽を述べているわけではない以上，許容されるものだ。しかし，この作品の致命的な問題は，語り手が地の文で嘘をついてしまっていることにある。最終的な真相の告白では，「私」はクウェート人に「地下を抜けて隣家の庭に出よう忠告した」と述べているのに，作戦遂行時の説明では，彼に「暗闇の中を登っていく階段を指示した」と書いてしまっているのである。⁵⁰ この一つの虚偽は，当然のことながら，残り全ての地の文に関しても疑いを呼び起こしてしまうものだ。その結果，この作品は探偵小説としては決定的に破綻してしまう。恐らくここで重視されるべきは，その形式性を犠牲にしても，役割的な記号と呼ばれる登場人物たちの中で，固有名を持つ人間が救われることのように思われる。

⁴⁷ Там же. С. 54.

⁴⁸ Там же. С. 76-77.

⁴⁹ Там же. С. 76-87, 102-103.

⁵⁰ Там же. С. 79, 102.

4. 大量死の問題

キムの探偵小説には共通して二つの特徴が見出せる。謎とその解決が示されるものの、「論理的解明」が不徹底であること、そして戦争を一貫した主題としていることである。ところでこの後者の特徴は、実は彼の探偵小説的ではない作品にも認められるものだ。

『日本の風景』は登山の描写から始まる短編小説である。主要な登場人物はアメリカ人外交官と子連れ日本人夫婦で、有名な滝の源流となる湖を目指し歩いている。アメリカ人は、山歩きをするには不自然なほど幼い娘を連れた夫婦に声をかけ、夫は元教師で組合のストライキに参加して解雇され、手術も控えていること、妻は教育大学を出たものの結核のため専門職に就けず、酒場で給仕をしていることを知る。⁵¹

しばらく山道を進み、彼らはようやく湖にたどり着く。その見事な風景に、これぞ「雪舟、蕪村や良寛の歌、志賀の小説や黒沢映画」だとアメリカ人は興奮し、まるで「涅槃」のようだと言いかける。

すると突然、必死の抗議の声が入り混じった轟音が響き、小学生が投げる紙飛行機のような三角形の戦闘機が空一面を一瞬の間に飛び去っていった。再び涅槃の静けさが訪れた。⁵²

その後、彼らは旅館へ向かい、翌朝には各々が目的の場所へと散開していった。外交官は日本の議員秘書との会談のため保養地へ、夫婦は一家心中するため滝の方へ。

最終的に娘の不自然な幼さの説明があるものの、その謎は事前に黙示的に記されたに過ぎず、推理もないという点で、この短編は探偵小説的ではない。しかしながら、ここにおいても戦争のテーマが背景にあり、それに呼応するように死が描かれている。そして同じことが、『広島からきた少女』ではより大規模な問題として考えられている。

これは、原爆投下時に爆心地近くにいながら、友達と喧嘩をして溝に落ちていたおかげで、左肩に火傷を負うだけで奇跡的に助かったスミコという少女の物語である。救護所で治療を受けていた彼女を、唯一の親戚である母方の伯父が探し出し、石川に連れて帰る。七年半後、十七歳になったスミコは、伯父を手伝う傍ら、文学活動を通して反戦運動を行うグループに参加するようになる。

このグループはしかし、1953年に起きた石川県内灘砲弾射撃場反対闘争がモデルと思われる米軍や日本の警察との戦いに次第に巻き込まれ、死者を含む犠牲者を出していくことになる。なぜスミコは原爆症に苦しみながらも、この過激な闘争に加わったのか。その

⁵¹ *キム。 Японский пейзаж。 С. 111.*

⁵² *Там же。 С. 115.*

理由の一つは、長崎で被爆後、石川に身を寄せたタカミという人物の思想を否定することにあった。

ある日、タカミは「前々からあなたとお話がしたかったのです」とスミコに会いにくる。彼は、自分と同様に長崎医大近くに当時住んでいて偶然助かったある女性が、つい最近亡くなったことを伝えに来たのだ。「お医者さんには通っていたんですか」と尋ねる彼女に、彼は「無意味です。この国の医者にはまだ治療法は伝わっていません……資料は全部、外人のところですよ」と答え、こう告げて去っていく。

「爆弾が炸裂した瞬間、我々は皆、死刑を宣告されたんです。ピカドンは一部をすぐに執行し、他には分割で刑を与えたんです […]」彼は火の消えたタバコを持つ手を上げた。「爆弾が閃光を放ったその瞬間、私たちの中にあつたものは全部燃え尽きて、外身だけが残ったんです。そう、例えば灰を落とさずにこのタバコを吸ったとして、全部燃えても形は残ります。タバコの形だけね。でも、タバコ自体はもうない、あるのは灰だけです。同じことが僕らにも起きたんですよ。僕らはもうだいたい前に死んだんだ……あなたもね。生きているように見えるだけで、実際には僕らは灰の人型なんですよ」⁵³

そうではないことを証明するために、彼女は闘争に加わるのだ。しかし、その意味でこの言葉は、『広島からきた少女』が背景としているもの、あるいは戦争における死を一貫して問いつけたキムの作品群のテーマを圧縮したものとして捉えることができるのではないか。つまり、世界大戦による「大量死」の問題である。そしてこの問題こそ、笠井潔によれば、探偵小説が確立するための時代的背景だった。

犯人は被害者を葬ろうとして、緻密な計画を練る。そのようにして殺害される人間は、戦場で偶然のように殺された無数の死者よりも、はるかに「人間的」に扱われているのではないか。さらに被害者の屍体は、犯人の行為を再現し追体験する探偵の推理により、第二の光輪を与えられさえするのだ。⁵⁴

つまり、二十世紀の両大戦の間に書かれた英米の本格探偵小説群とは、「第一次大戦が生み出した大量死の現実に対する恐怖の隠蔽形態」⁵⁵ だったのだ。笠井の大量死理論には

⁵³ *Kim. Девушка из Хиросимы. С. 51-52.*

⁵⁴ 笠井潔『探偵小説論Ⅱ：氾濫の形式』東京創元社、1998年、21頁。

⁵⁵ 法月綸太郎「笠井潔論：大量死と密室」笠井潔編『本格ミステリの現在』国書刊行会、1997年、58頁。本論は法月のこの論考に強い影響を受けている。

批判も寄せられているが、⁵⁶ 時代精神を大枠で読み解いた指摘としては非常に参考になる。例えば、キム同様、探偵小説的作品を主に 1950 年代以降、残していくことになる代表的な作家として、アルカージ・アダモフは『まだら事件』の冒頭を主人公がドイツから復員する場面から始め、キムと個人的な親交のあったユリアン・セミョーノフも独ソ戦を大きなテーマとして扱っていた。⁵⁷

戦争と探偵小説の関連という点では、キムの«Кобра под подушкой» (『枕の下のコブラ』) に置かれたエピグラフが興味深い。第二次大戦の英独の諜報戦にソ連の記者らが関わるこの作品では、アガサ・クリスティーの『N か M か』の「戦争が終わったら、私もいまの仕事のことを少しは話してあげられると思うわ。ぞっとする面白い仕事なのよ」⁵⁸ という一節が冒頭に引かれている。この一節自体は、ナチスのスパイの正体を暴いたタペンスが子供たちに語ったものだが、エピグラフとしては二つの含意を読み取れる。一つは内容の予告として (ソ連の記者がイギリスの元諜報員に真相を告げるのが戦後である)、もう一つはまさに戦争が終わり「ぞっとする面白い仕事」の話をしている作者キムに対する自己言及としてである。後者の意味で取るならば、彼にとって探偵小説とは、人間が使い捨てられていく「ぞっとする」経験に促されて始められるジャンルだったとも言えよう。この意味で、彼もまた英米や日本の探偵小説作家らと問題意識を共有していたのである。

だが、そう考えた場合に一つの疑問が残る。それこそが人間の死に固有性を回復させるという「論理的解明」の彼の作品における弱さだ。この問題をどう捉えるべきなのだろうか。

実は、キムは本格ミステリの古典的な題材に批判的である。例えば『幽霊たちの学校』では、「指揮官」の殺害について、与えられた情報のみで安楽椅子探偵のように推理するよう命じられた「私」が、「そんな形の捜査があるのは探偵小説の中だけです」⁵⁹ と反論する。「Агент особого назначения» (『特命エージェント』) にも興味深い記述がある。密室で殺害された老人の遺体が消え、部屋にあったはずの重要書類も見つからない。この状況に関し探偵の上司役が、「そんな内側から鍵のかかった部屋や [重要書類の] 秘密の隠し場所なんて、下らない探偵小説の中だけの話だ」⁶⁰ と述べるのである。

もちろん、ミステリで作中に事件の非現実性への言及があるのは珍しくない。それらは、現実との無関連性を読者に想起させ、物語が一つの完結した全体であること、つまりその

⁵⁶ 権田萬治「第一次大戦での大量死と本格探偵小説との関係についての疑問：笠井潔氏のチャンドラーやヴァン・ダインに関する見解をめぐって」『ミステリマガジン』2011年3月号。

⁵⁷ Куланов. В тени. С. 237-239.

⁵⁸ Ким Р.Н. Кобра под подушкой // Ким Р.Н. Школа призраков. С. 199. アガサ・クリスティー (深町真理子訳)『N か M か』早川書房、1978年、318頁。日本語はキムのロシア語からの翻訳である。

⁵⁹ Ким. Школа призраков. С. 82.

⁶⁰ Ким Р.Н. Агент особого назначения. М., 2003. С. 27.

ゲーム性を強調する働きをするだろう。しかしキムの作品は、慎重な推論で謎が解明されるようには構築されておらず、こうした言辞が物語の形式性を際立たせるものとしては機能しない。従って、非現実性への言及は、字義通りに受け取るのが妥当であろう。キムの政治警察的な仕事との関わりを考慮すれば、それはこう読み取れる。つまり、そのような特殊犯罪など実在しないのだと。彼の作品には史実に忠実であろうとする傾向があるが、事実性の重視という判断こそが、そこにおける論理的解明の弱さにつながったのかもしれない。

5. 固有名の問題

しかし、キムはかつて非現実的だが辛うじて辻褄が合いそうな話を作ったことがある。「モトノ・キング」の物語だ。しかもこの特殊犯罪の物語は、結果的に読者（審理する側やモゾーヒン）に対し信憑性を持ったようなのだ。

この名前は供述から構成された一種の概念である。固有名と概念の違いは、前者がその対象をあらゆる可能世界で同一的に指示する、つまり対象の反実仮想を許容するのに対し、⁶¹ 後者にはそれが生じないことだ（「三角形」と言われ、辺が曲線や四本などの場合を仮定できない）。⁶² 同様に、キムが日本人だった可能世界は想定できるが、「モトノ」は別性質を持ちえない。そうした途端に、供述の一貫性が崩れてしまうからだ。逆に言えば、記述の集合からそれ以外の可能性がなさそうだからこそ、彼の供述＝物語は信憑性を持ったのである。

実はこのことは、優れた探偵小説にも言えることだ。必要十分な記述が作中に配され、ただ一つの答えだけが許される。手掛かりが足りない、別の答えの可能性が残されるようでは失格なのだ。対照的に、キムの探偵小説では論理性が弱く、反実仮想的な真相の候補を挙げる余地が残されている。この意味で、彼はかつて自らが生きることを強いられた「モトノ・キング」という記号的な存在についての物語よりも、固有名的な物語に向かったのである。

「謎－論理的解明」における「二重の光輪」は、「大量死」が生み出した無数の記号的な死者を、反実仮想の排除というまさに記号的な操作により救い出す。これに対し、キムは可能性を限定しなかった。つまり、彼の作品は形式において固有名的である。これは探偵小説としては欠点だろう。その代わり彼は、内容においても固有名の問題を扱うことで個体の個性（単独性）を回復させようとする。『最後通牒の謎』や『幽霊たちの学校』が、

⁶¹ ソール A. クリプキ（八木沢敬・野家啓一訳）『名指しと必然性：様相の形而上学と心身問題』産業図書、1985年。

⁶² 大澤真幸『〈自由〉の条件』講談社、2008年、66頁。

探偵小説としては難があったのに対し、固有名を持つ個人の単独性を前面に押し出すことには成功していた点に注目しよう。レフ・スラーヴィンの指摘にあるように、「世界的な出来事が普通の人間の運命に与える影響、これこそがキムの『探偵小説』にある真のパトスなのである」。⁶³ そして、そのことが最も明確なのが『広島からきた少女』である。この作品はスパイ小説にもなりえる題材を扱いながら（実際、地元住民と米軍の間を行き来する二重スパイのような人物が登場する）、そうはならなかった。固有名の問題が優先されたからだ。

スミコは被爆後の救護所で、看護婦が黒板の「219」という番号の下の名前を消し、合掌するのを見る。その患者が亡くなったのだ。

九番のござに寝かされていた亡くなった少女の場所には、新しい少女が運び込まれていたが、三日後には体に紫斑が現れ、嘔吐が始まり、夜にはまだら模様の雨合羽の者たちに運び出されていった。看護婦は黒板からカワノ・タエコの名前を消し、合掌した。次に運び込まれてきた少女は、ほんの小さな子供だった。彼女は数日後に亡くなり、雨合羽の男は彼女を脇の下に抱えて運び出していった。看護婦が黒板から消したのはミエコという名前だけだった。姓は分からずじまいだった。彼女は自分の苗字を知らなかったのだ。⁶⁴

固有名が消え、記号になることが死を表しているのだとすれば、その逆に、名前を取り戻すことは生を意味する。意識が戻ったスミコは、枕元の「177」との数字を目にし、黒板の番号の箇所を見るが、そこに彼女の名前はない。自分は死ぬのかと看護婦に尋ねた彼女は、「あなたのお名前が分からなかったのよ。だから番号だけ書いておいたの。苗字と名前を教えて」⁶⁵ と告げられる。彼女が生還するのは、まさに固有名を取り戻すと同時なのだ。

後日、スミコは米軍関係者から「CC-K 2279」と記された金属製の認識票を渡される。後にそれは ABCC（原爆傷害調査委員会）の「ケロイド 2279」ないし「傷害カテゴリー・ケロイド 2279」の意である可能性が判明するが、⁶⁶ これが彼女の後の人生に大きく関わることになる。

石川に移住後、スミコが伯父と共に暮らす地区に赤十字の献血募集がやってくる。伯父が姪のことをその職員に相談したところ、彼は街の医者を紹介された。後日、彼女はそこへ向かうが、認識票のことを話すと、まず米軍基地に行き、それがもう有効ではないこと

⁶³ *Славин Л.* Рука друга // *Ким.* Тайна ультимагума. С. 310.

⁶⁴ *Ким.* Девушка из Хиросимы. С.11, 14.

⁶⁵ Там же. С. 12.

⁶⁶ Там же. С. 159. ABCC の設立は 1947 年なので後者が妥当と思われる。

が確認できたら、また来るよう指示される。医師は面倒を避けるため、治療を拒んだのだ。⁶⁷そして記号として登録された彼女は、殆どの日本人医師の治療を受けられなくなる。

そうした中、スミコの家を白衣の米軍関係者が突然訪れ、彼女から血を採り帰っていった。後日、認識票持参で警察署に来るよう連絡を受けたスミコはそこへ向かうが、案内されたのはあの白衣の人物の部屋だった。「教授」と呼ばれるその男は認識票と引き換えに、今度は永久証明書なるものを彼女に渡し、以後、自分が治療を受け持つので、日本の医者にはかからないよう命じる。帰路、彼女は友人らのもとに立ち寄り、この出来事について相談する。友人の言では、それは ABCC の証明書であるが、氏名の記載がない代わりに「XG98」とだけ書かれている。その意味を、居合わせた別の友人がこう語る。「研究のためにその ABCC に永遠に縛りつけようとしてるんだ。実験に使うネズミやモルモットも名前はなくて番号だけだ」と。この言葉の正しさは後日、ある日本人医師によって確認されることになる。スミコが「教授」の部屋で耳にした名前の薬品は、動物実験に用いられるものだったのだ。⁶⁸

記号と固有名の対比が、ここでは非常に明確に表れている。さらに、まさに死者（「幽霊」）の無名性（仮名性）を扱っていた『幽霊たちの学校』を見れば、キムが固有名の問題にかなり自覚的であったことが窺われてくるだろう。この作品では、教官（幽霊＝スパイ）らは「ヴェラスケス」や「ルーベンス」など画家の名前で呼ばれ、学生だった「私」もやがて「レンブラント」⁶⁹ というコード・ネームを持つようになる。だが、彼は自分を機関に送り込んだ「ボス」への最後の連絡で、「幽霊」に対する反乱を宣言する。そもそも彼は作家志望で、取材として機関に潜り込んだのだった。だから、クウェート人の殺害計画など認められるはずもなかったのである。むしろ、そのような計画こそが「私」に「人類の敵、その輝ける未来の敵との闘争に全ての力と生涯を捧げる」という決断に至らせることになる。そして、その手始めに彼は機関の所業を暴露するため、会見を開き「顔」をさらすと告げる。⁷⁰

顔とは何か。実はこの作品には、顔への言及が頻繁にある。しかしそれは、いわば記号としての顔（仮面）だ。物語の序盤、「私」は「ヴェラスケス」の研究書から、「人の顔貌は四十八のタイプに分けられ、各々がさらに幾つかの下位タイプに分かれる」ことを知る。「幽霊」の理想は、こうした類型化された顔を自由に操れるようになることなのだ。その証拠に、「指揮官」の顔は「平坦」で「ニュートラル」だとされている。⁷¹ 顔は顔そのも

⁶⁷ Там же. С. 55-56, 73-75.

⁶⁸ Там же. С. 155-156, 165-166, 171-172, 176.

⁶⁹ *Ким*. Школа призраков. С. 101.

⁷⁰ Там же. С. 105.

⁷¹ Там же. С. 11, 34, 37-38. 無個性と幽霊・仮名・顔の欠如という対応は、キムの 1948 年発表の «Путешествие на американский Парнас» (『アメリカン・パルナスへの旅』) でも描かれている (*Ким*

のとしては存在せず、特定の類型を表現する仮面であり、訓練により作られるものなのだ。だが、「私」は顔を解放しようとする。つまり彼は、仮面（記号としての顔）を外し、本来の顔をさらそうというのだ。

「記号：固有名＝仮面：顔」という関係性を考慮するなら、「私」が会見を開くことは、「レンブラント」という記号を捨て、本来の固有名を回復させる行為に他ならない。ちょうど「モトノ・キング」というスパイの記号、その他複数の仮名、役割の記述の代用から、ロマン・キムという名前を取り戻したように。この意味で、探偵小説は彼にとって固有名を救い出す一つの場所だったのである。⁷²

ただし、固有名・単独性への執着は「それ自体としてはアナクロニズムに過ぎない」。⁷³ そもそもの古典的パズラーでさえ、「人間的」な動機よりもトリックの集積に主眼を置く傾向にあったのであり、次第にミステリの一つの主流となるスパイ小説では、探偵ないし犯人の固有性は、むしろ敵味方の謀略ゲームを阻害する要素となるだろう。⁷⁴ こうなると最早、「この私」の問題は端から成立しない。この流れの中で、固有名への執着は反動的とも言えるものだ。しかし、キムはスパイ小説的とも言える作品も書いていたのだった。つまり彼は、人間をゲームの駒のように扱う作品を書くと同時に、単独性の問題からも離れることができなかつた。彼はその間を揺れ動いていたのだ。

以上、見てきたように、大量死と無名性、そして固有名の回復という探偵小説の二十世紀的問題がキムの小説では先鋭に取り上げられており、そのことが彼の作品を非常に独自のものにしてている。とはいえ、本論はまだその表面に触れたに過ぎず、より詳細な検討が今後、求められる。

P. Путешествие на американский Парнас // Новый мир. № 1, 1948. С. 236, 243, 253, 257..)

⁷² «Дело об убийстве великого сыщика» (『名探偵殺人事件』) では「シャーロック・ホームズ」の死が描かれる。アメリカの出版社がホームズ物の二次創作を大量出版することを聞いた「アーサー卿」が、「これこそシャーロック・ホームズの本当の殺害じゃないか。オリジナルの、現実におけるね」と語る (*Kim P.H. Дело об убийстве великого сыщика // Kim. Тайна ультиматума. С. 42.*)。これはオリジナルに宿る剰余性、固有名「ホームズ」が諸性質の集合に置き換えできないことへの信念を表している。

⁷³ 笠井『探偵小説論Ⅱ』36頁。

⁷⁴ 法月綸太郎の指摘 (東浩記『不過視なものの世界』朝日新聞社、2000年、138-139頁。)

R. N. Kim and the Problem of the Proper Name: On some of his Japan-related works

SAKANAKA Norio

The aim of this study is to analyze some of Roman Nikolaevich Kim's works that deal with the theme of Japan and to point out their features.

Broadly speaking, in Russia after the Great Patriotic War, some authors began to write detective novels in the 1950s. However, their works, in general, were not intended to be logical puzzles which readers would have the joy of solving. In other words, there is a salient difference between Russian and Western detective novels. Concerning this subject, we are considering some works of Kim, who is said to be a Russian pioneer of this genre.

Kim was well acquainted with the detective novels of Japan and the West. However, even in his works solutions to riddles are not sophisticated compared to these prior novels. This paper regards this problem as the outcome not only of his skills as a writer, but also of his personal history.

Kim had multiple names. He was born in Vladivostok, his parents were Korean but he spent his childhood in Japan and, after returning to Russia, he enrolled in college as a Russian. He changed names at each turning point in his life. He was arrested as a Japanese spy in 1937. In his testimony at that time he invented names again, and by making up a story was able avoid the worst result. Apart from the name "Roman Kim", all his other names can be regarded as fulfilling the role that is requested of it at a certain moment rather than being a proper name.

In well-constructed mystery fiction readers can reach the singular truth based on description. In other words, assumptions which contradict the text are not accepted. In contrast, in Kim's works it is possible to guess multiple truths based on hints given. Counterfactual assumptions are accepted. This means that his works are analogous to the characteristics of proper names. This is because proper names also allow non-factual description. The same is true in his works (like, the truth could have been different).

In this way, in his literary works as in his personal history, Kim continued to deal with the problem of proper name. In this paper, we analyze the significance of his attachment to names and discuss its influence on his literature.